

○ 牧野富太郎博士の封印 (伊藤 洋) Hiroshi ITO: Dr. T. Makino's seal upon an envelope



今年の第4—6号の表紙に、牧野先生の「巻きの」サインをカットとして入れた。ところがこれについて私は大きな誤りをおかしていた。先日木村有香博士からご指摘とともに、昭和12年と14年の牧野先生からのお手紙6通の封筒の裏面のコピーをいただいた。いずれも角封筒で封じ目に直径 15 mm のきれいな「巻きの」

の印がある。手書きでなく判こらしいことは、6通とも同じ大きさ同じ線、そして封じ目の段差で墨切れができてることなどから判定できる。左の「巻きの」はコピーから模写したもの（実物の1.5倍）で、記憶を頼りに描いた私のカットとは雲泥の差がある。ここに誤りを訂正し、合わせて表紙の品位を落としたことをお詫びする。

(文京区小日向 1-22-6)

□ 大阪府：平成元年度箕面川ダム自然回復工事の効果調査報告 144 pp. 1990. 開発に先立つ環境影響評価事前調査は、それを行うことが義務付けられており、自然保護運動の流行もあってたくさん公表されている。しかしながら開発を行ったあと、実際に環境がどう変化したか、事前の予測とどう違っていたかという調査報告はほとんど目にしない。すくなくとも東京都ではこういう事後調査と報告は事業者が義務付けられているが、それをいつ、どのように行かかは、(無理もないことであるが)はっきり決められていない。自然保護団体も新たな開発にかかわる予測調査の対応に追い回され、予測の基礎をなす追跡調査にはあまり関心を持たない。マスコミもまた然りである。南アルプススーパー林道はその後どうなったのだろうか？ 本書は勝尾寺を含む箕面川上流の国定公園内に、6年前に建設された治水ダムの環境影響事後調査報告で、環境調査株式会社の手になる。この開発事業では場所が強い反対運動があり、それを取り入れて計画の変更、事後の自然回復事業などの対応があり、これまでも1977、1980、1983年に保護、回復に関する調査研究が報告されている。植物関係では植生の調査と現存量調査の報告がある。植生調査では、以前にくらべて短年生草本群落がへり、多年生草本や先駆低木林群落におきかわったこと、この変化には「表土まきだし」工事の効果が大きいこと、予測した植生回復の経過をおおむねたどっていること、工事にともなって侵入した植物はほとんど払がっていないが、元々ある古い森林に依存する種もほとんど回復していないことなどが報告されている。市販品ではないが、希望者は大阪府北部特殊事業建設事務所(〒567 茨木市西駅前町5-10 大同生命ビル内)に問い合わせられたいとのことである。

(金井弘夫)